

『アーモンドの会』

— 「おたいせつ」 — 弱さを想う

与那原教会 牧師 具志堅 篤

「アーモンドの会」の皆さま、おはようございます。台風25号の影響もあり、もしかしてそちらへ向えないのではと心配しておりましたが、こうして無事今朝、皆さまをお会いでき大変 嬉しく思います。

私の名前は具志堅 篤と申します。よく、具志堅用高さんとはご親戚ですか？と問われます。そんな時、私はいつも「具志堅用高さんとは親戚ではありませんが、彼の大ファンです。そして、具志堅用高はボクサー、私 具志堅 篤はボクシー（牧師）」と答えるようにしています。これは、冗談ですが、実は、この冗談のネタは私のオリジナルではありません。

この3月まで私は沖縄の中部にありますが読谷教会の牧師をしておりました。1998年から28年間、読谷教会に仕え、この春から南部にありますが与那原教会に転任いたしました。現在、沖縄教区の副議長として教区に仕え、教団では宣教委員、そして宣教委員会の下に置かれた「障がい」を考える小委員会の委員長として奉仕させていただいています。他に、学校法人 沖縄キリスト教学院(大学) の理事、社会福祉法人 琉球キリスト教奉仕団「愛の村」〔特別養護老人施設〕理事、与那原教会では小規模 保育施設と学童クラブの施設長として地域に仕えさせていただいております。

さて、先程の冗談の元ですが、読谷教会時代、赴任当初から私はご高齢の信徒の方お二人とお供し、一人の姉妹（当時九十歳代後半）を毎月一度訪問していました。そして、その方のお人柄、その信仰から多くのことを学ばせて頂きました。

とても貧しい家で、精神を病んでいる息子さんが寝たきりのお母さんUさんのお世話をしていました。私たちが訪問すると肩ひじで身を起こして丁寧に挨拶をされます。新聞にも毎日目を通しておられました。新聞を広げることはできないので、記事単位？で新聞を切り大きな虫眼鏡で読まれしっかり今、社会で起こっていることなどをお話されました。彼女からご自身の近況などを伺いましたら、一緒に讃美歌を歌い、重度の難聴もありましたので彼女の耳元で讃美をリードし、聖書を開き短くお話をしてお祈りしました。すると、彼女もしっかり手を組んでお祈りされるのです。その祈りは、ちょっと表現は変かもしれませんが大変迫力がありました。霊的な迫力というのでしょうか。祈りの言葉は、「天のお父さま、私のような小さき者、弱き者、そして、罪深い者この私をどうか憐れんでください。具志堅 篤牧師をこの家に遣わしく下さりありがとうございます。どうか、具志堅 篤牧師を神様のご用のために働かせてください。健康をお守りください。教会の兄弟姉妹を祝福してください。イエス様のお名前によって祈ります。アーメン」近所にも聞こえるのではと思うほど大きな声で祈られるのでした。

祈りを終えると精神を患っている息子さんにお茶を出すように指示し、彼も一緒にお

茶を頂きながら、Uさんはいつもの冗談を言われるのですね。それが「具志堅 用高はボクサー、具志堅 篤はボクシー（牧師）、具志堅せんせ〜い、頑張ってください〜い！」と言って私を送り出すのです。まるで祝祷です。

実は、Uさんは一度も教会へ足を運んだことはありませんでした。しかし、彼女の信仰は教会の誰よりも福音的・教会的でした。それは、Uさんの娘さん（看護師をしておられたが、若くして召され）が生前に読谷教会の熱心な信徒さんで教会で聞いた礼拝の様子、聖書の話、祈り、讃美をお母さん（Uさん）にいつも報告していたとのことでした。

Uさんは20年程前に104歳で召されました。しかし、私の牧師としての働きはUさんの執り成しによって支えられていた！ということは過言ではありません。本当にUさんとの出会いは私にとっては摂理的であり、主に感謝です。

さて、ここから私自身のお証しをしたいと思います。私は1960年1月生まれ。1歳なる前には「赤ちゃんコンクール」で入賞し所謂、健康優良児でした。幼稚園は、教会の信徒さんが運営されていた「友愛幼稚園」〔これは現在、与那原教会に継承され、小規模ではありますが、友愛乳児園・友愛幼稚園・友愛学童クラブとして活動しています。〕に通い、それがなかったら私は教会へは繋がっていなかったと思います。幼稚園の先生は勿論、教会の信徒さんで、とても優しい方で私を大切な存在として扱ってくださいました。

小学校に入りますと、健康優良児はどこへ行ったのか、いろいろな身体的課題が生じるようになりました。心音に変だと心臓の精密検査を受けさせられたり、歩き方が変？ 筋ジストロフィーを疑われ、歩いて行ける距離なのに、バス登校させられり…。暫くして、それらはクリアしました。しかし、どうしてもクリアできなかったのが難聴です。健康診断時の聴力検査は大嫌いでした。当時はストップウォッチで検査をしていました。聞こえていないのに聞こえるふりをしたり。当時はまだ軽度の難聴で音は入るのですが、言葉として入ってこない、ですから相手の口の動きを見てコミュニケーションをとって、声の小さい人は友だちになれなかった。（笑）

中学に入ると、席が後方の時 当然ですが成績はガクンと下がり、前に行くと上がりました。（笑）シャイな性格なので自分から前にと申告できなかったのです。神学校の授業は、最前席、毎回カセットテープに録音。後で聞き返すことはしませんでした。が、…。大木先生、熊沢先生、松永先生、赤木先生の声は今でもテープを通して聞くことができます。

先述しましたが、神学校を卒業し、最初に遣わされた教会が読谷教会でした。牧師として働くにはどうしても補聴器は必須だと思い切って高価ですが、補聴器を求めました。高度の難聴で障害者手帳を持っています。因みに、今回、シルバーウィークで航空券は非常に高く殆ど割引が効きません。そこで私は障害者割引〔手帳〕を利用して何とかここに来ることができた次第です。

身体的な課題ですが、2000年に直腸近くにできた拳大ほどの腫瘍を摘出するために全身麻酔で手術を受けました。大腸ポリープの摘出も3度ほど。食中毒で死にかけたこともあ

りました。2020 年には新型コロナ発症で重症！ 退院時には、両肺が半分に萎縮していました。少し歩くだけで息切れです。医師に尋ねました。「どうすれば元に戻るか？」医師の答えは「一度壊れた肺は元には戻らない」でした。私は自分のために祈って欲しいと嘆願することはあまりなかったのですが、この時は流石に教会員、牧師仲間、キリスト者の友人たちに祈りの要請をメールなどで呼びかけました。そして普段の生活では食事・運動とセルフリハビリに励み、三ヶ月後の検診の時には半分に萎縮した両肺が元に戻っていました。当然、病院の看護師さんたち、主治医も大変喜んでくれました。以前よりも運動量を増やしたりセルフリハビリは続けています。私はその時ほど神様の憐れみを覚え感謝の念に満たされたことはありません。

体力が少しついたところで剣道仲間から「ねんりんピック」に出場してみないかと声をかけられ沖縄県大会に参加しました。六十歳以上の剣士が東西に分かれて試合をします。初出場でしたが、優秀選手賞を頂きました。以来参加を続けていますが、去年は二度目の優秀選手賞を頂き、県代表選手5人の一人として岐阜県で開催された全国大会に出場させて頂きました。〔昨年度の優勝チームと対戦し、負けました〕今年の6月には全国高齢者武道大会が日本武道館であって個人戦にエントリー。〔予選リーグ一勝一敗で決勝トーナメントには上がりませんでした。〕が、楽しかった。「打って反省、打たれて感謝」の精神です。〕

油断は禁物です。去年の人間ドックでレントゲンの結果、肺に影が見えると紹介状を渡されました。いかなきゃと思いつつもつい精密検査を受けずに先日、今年の間ドックを迎えました。肺の影は消えていました。皆さんも自身の健康に関してはいろいろと課題はおありだと思います。キリスト者は、信仰と身体、精神の健康を切り離して捉えるものではないと私は考えています。そうでないと霊肉二元論に陥ってしまいます。

そこで私の心の内にこだまする御言葉を紹介したいと思います。

◎「…自分自身については、弱さ以外に誇るつもりはありません。…また、あの啓示された事があまりにもすばらしいからです。それで、そのために思い上がることのないようにと、わたしの身に一つのとげが与えられました。それは、思い上がらないように、わたしを痛み付けるために、サタンから送られた使いです。この使いについて、離れ去らせてくださるよう、わたしは三度主に願いました。すると主は『わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ。』と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。」

《Ⅱコリント 12:5～9》

私はこの御言葉は、本当に凄い御言葉だと思います。

☆『わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ。』
「弱さ」＝ギリシャ語の語感では「無力」「病」「虚弱」、"weakness" は必ずしも「罪」ということではありません。虚弱体質、視力が弱い、聴力が弱い、…。パウロの弱さが何であったのかは記されていません。胃腸系の病とか、てんかんがあったとか、視力に問題があったとか、実際は何であったのかは分かりませんが。とにかく、彼はここで

自分の弱さを自覚し、主がそれをよしとされていることを受け入れているのです。

本日の講演は「障がい」を思う となっていますが、今朝、私は「弱さを思う」としてお話させて頂いております。「弱さ」は、主にあっては恵みなのだとすることを分かち合いたいのです。弱さが恵みだということを受け入れることはそう容易なことではないことまた確かです。しかし、忍耐して主に自分の弱さを嘆き、その弱さをさらけ出して行く勇気が与えられる時、まるで宝を発見した時の喜びが心の底から湧いてくるのが分かります。

青年時代から親しくしているTさんは、70歳過ぎてから突然、前身に力が入らなくなりました。日に日に食欲も落ち、筋力も落ち、次第次第に体重も落ちていくのが分かりひと月以上にわたる精密検査の結果"ALS"と診断されました。本人も家族も大変なショックを受けられ、「神さま、なぜ私が？」と問わずにおれない日々を過ごしていました。大学病院で半年近くの入院生活を過ごし先日、自宅から近い所にある施設に入所しましたとメールを頂きました。彼は、おとなしい性格で自分を責めるようなことはあって、家族に当たったり、牧師になぜ神さまは？と問い詰めるようなことはしませんでした。ただ、日々のディボーションの中で今、そこにある神さまの御旨を聞くことに集中されていたようです。〔ディボーション誌『アッパールーム』に親しんでおられました。〕声を発することができないのでペンをとって小さなノートでコミュニケーションをとっていました。少しずつ勇気が湧いてきたようで今では積極的にラインでメッセージを送ってくれるようになりました。

"ALS"と言えば、私の青年期に『愛隣園』〔キリスト教主義 児童養護施設〕によくボランティアで関わっていました。そこにUくんがいました。彼は何かいつもラグビー選手のようなヘッドギアを被っていました。転倒して怪我を防ぐためのヘッドギアだったんですね。私自身この施設との関わりは長かったので保育士の方に彼の生い立ちなどを教えて頂くことができました。幼児期から酷い虐待を受けており、親の愛情、大人の人の愛情に大変飢えている状態のようでした。それだけでも本当に気の毒だなと思っていたのですが、何と彼は"ALS"ということが分かり、休日になると教会の青年たちと一緒に彼を施設から連れ出して公園や映画を見に連れて行ったり少しでも彼が心を許して自由に遊べる雰囲気を作りを大事にしながら休日を過ごさせて頂きました。次第に曇った顔から子どもらしい笑顔が見られるようになりました。しかし、"ALS"の進行によって施設では過ごすことができず専門の施設に移りました。専門施設に移ってからは見舞いに行くことしかできませんでしたが、私たちには屈託ない笑顔でいつも迎えてくれたのを覚えています。果たして、彼は成人を迎える前に召されたのを聞いた時の悲しさは今も忘れることはできません。そういう活動と一緒につきあってくれた方が後に今の私の伴侶となっていることに摂理を覚えます。

今、私たちは間もなく90歳になる母と同居しています。28年牧会した読谷教会を辞し、母教会である与那原教会に転任した一つの理由が母との同居です。男の子4人を育て上げ、仕えてきた夫は2年前に召され、もう仕える対象がなくなったことが一機に母を認

知症へ向かわせました。「何もできなくなった自分はもう死んだ方がいい」をいつも口にします。念願の長男夫婦との同居に心穏やかな時には照れてるような小さな声で「ありがとう」と言います。「死んだ方がいい」と「ありがとう」の割合は7：3ですが、「ありがとう！は僕の方だよ母さん」と心の中で言っています。やはり、私も照れているのでしょう。口に出しては言いません。母がだんだん小さくなっていく、衰えていく身体と精神を見ていると「シャボン玉」〔唱歌・野口雨情 作詞・中山晋平 作曲〕が口ずさむことがあります。

シャボン玉とんだ やねまでとんだ やねまでとんで こわれてきえた
シャボン玉きえた とばずにきえた うまれてすぐにこわれてきえた
かぜ かぜ ふくな シャボン玉とばそ

野口雨情の娘（みどりさん）は、生まれて七日目に召されました。その時の心情を野口雨情は歌にしたようです。

そして、この歌が心に響くとまたなぜか「カインとアベル」のアベルを思い出すのです。カインは身体たくましく成長したのかも知れませんが、アベルという名前は「息」、「儂さ」「無価値」を意味します。虚弱で生まれてきたのでしょうか、大人になりきれないので召されるのではと親はそう名付けたのかも知れません。恐らくアベルは誰よりも自分自身が自らの弱さを自覚していたのではないのでしょうか。だから、命の源なる神へ最も良い献げ物をすることができたのでしょうか。自分は生きているのではなく、生かされているのだと。

◎「信仰によってアベルはカインより優れた いけにえを神に献げ、その信仰によって正しい者であると照明されました。神が彼の献げ物を認めたからです。アベルは死にましたが、信仰によってまだ語っています。」《ヘブライ人への手紙 11:4》

私の講演の後に「主われを愛す」と皆さんと一緒に讃美したいと思います。実は、先ほどの「シャボン玉」作曲は中山晋平ですが、彼は「シャボン玉」の作曲の際、その曲想を「主我を愛す」"Jesus Loves me This I kow" にヒントを得たと言われています。そう言われてみれば、「シャボン玉」の歌詞ともよくマッチしているではありませんか。

☆「わたしの目にあなたは価高く、貴く わたしはあなたを愛し あなたの身代わりとして人を与える 国々をあなたの魂の代わりとする。」《イザヤ 43:4》 新改訳では「あなたは私の目に高価で尊い。」と訳されています。「愛」、江戸時代に日本にやって来た宣教師たちは日本人に聖書が示す「愛」の概念を教えるのに大変苦勞されたようです。そこで彼らは「愛」という言葉を「おたいせつ」と訳したそうです。

聖書のメッセージ、神はあなたのことを「おたいせつ」に思っておられ、そのように扱われるということです。その中でも特に小さな者へ注がれた「愛」は大きいのです。私は最近、よく足の小指をぶつけて痛い思いをすることがあります。しょっちゅうです。

どうしてだろう？ と、他の人に訊ねてみれば、言われて見れば、皆さん、自分もそうだと答えます。足の小指は、身体の一番外側にあつて、脳が小指の身体位置を丁度、その小指の分ずれて認識、誤認識ですね。そういうことが起こるのだそうです。

しかし、神さまは小さな存在を決してお忘れになるようなことはありません。そのために御子を世にお遣わしになられたのですから。

☆「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」《ヨハネ 3:16》

皆さん、人は皆どこか欠けがあります。私たちはジグソーパズルのようなものです。お互いが欠けを補い合いながら一つの絵を完成させようとしているようなものです。イエス・キリストの福音に触れるとき、お互いの欠けが誰かの必要を満たすように造られていることが分かります。イエス様は互いに愛し合い（おたいせつに）なさいと言われました。私たちの交わりが互いに愛し合う（おたいせつ）者となるならば、人々はそこにイエス・キリストを通して現れた「神の愛」に気づくことでしょう。

祈ります。

天の父よ。あなたの御名を崇めます。今朝は「アーモンドの会」の皆さまと共に讃美を捧げ、御言葉に聞き、あなたの御業を拝する機会が与えられましたことを心より感謝いたします。あなたは、1995年から、30年以上にもわたってこの会を守り導いて来られました。どうぞ、これからも小さき者と共に歩むこの「アーモンドの会」の働きを祝福くださいますように。この働きを通して人々があなたを証しすることができますように。小さき者、そして教会の頭なる主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン